

基幹システムの将来像における 〈レガシー／オープン〉の二元論を超えて

July 19, 2007

IDC Japan
ITサービス リサーチマネージャー 伊藤 未明

Agenda

1. COBOLの現状
2. 基幹システムの課題:
レガシー／オープン二元論を超えて

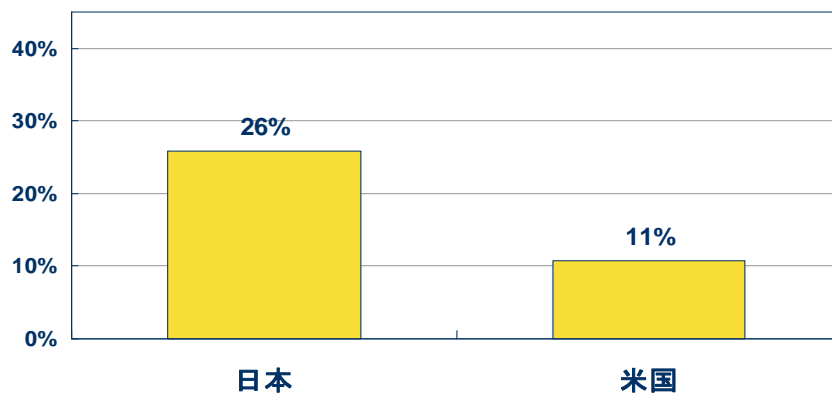
1. COBOLの現状

2. 基幹システムの課題:

レガシー／オープン二元論を超えて

メインフレーム出荷動向: 日米

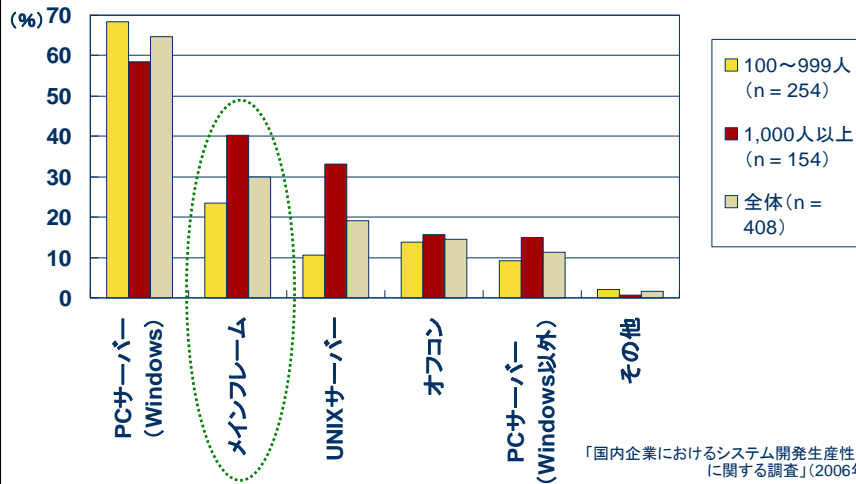
サーバー出荷金額に占めるメインフレームの比率(2005年)



Source: IDC Japan, July 2007

システム開発における メインフレーム利用の現状

2005年の最大プロジェクトにおける開発対象環境（サーバーの種類）



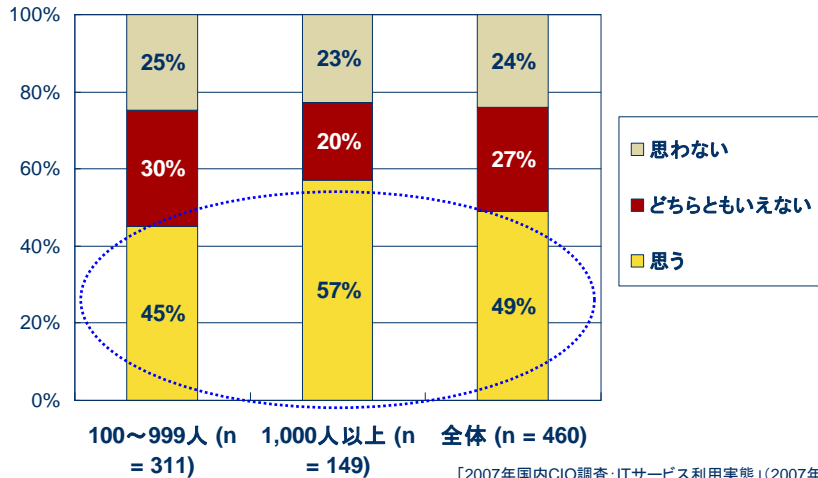
複数回答

「国内企業におけるシステム開発生産性と品質向上に関する調査」(2006年9月実施)

Source: IDC Japan, July 2007

メインフレーム利用の今後(1)

既存のソフトウェア資産が膨大なため、メインフレームを今後も使用し続ける企業は多いと思いますか？

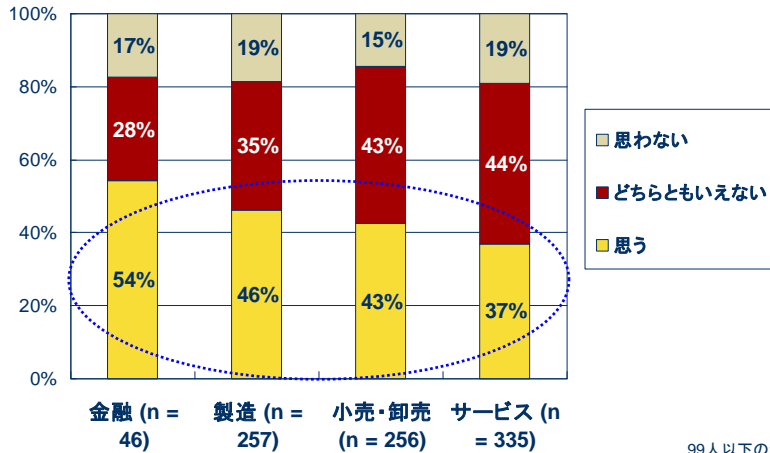


「2007年国内CIO調査:ITサービス利用実態」(2007年6月)

Source: IDC Japan, July 2007

メインフレーム利用の今後(2)

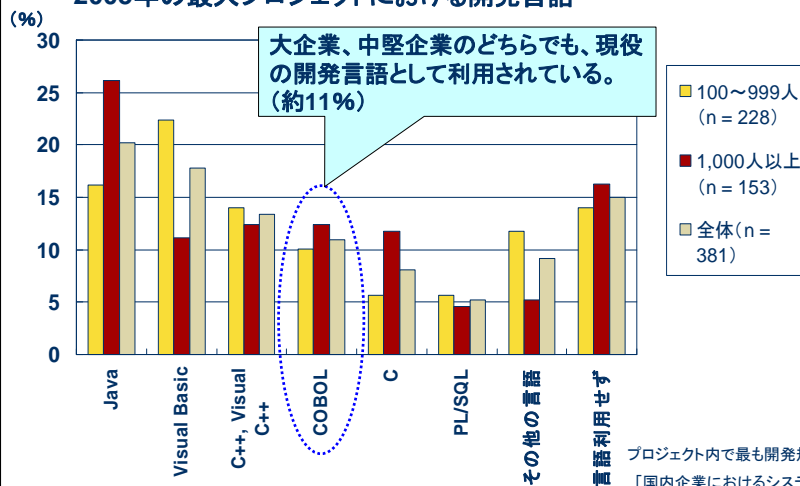
既存のソフトウェア資産が膨大なため、メインフレームを今後も使用し続ける企業は多いと思いますか？



99人以下の企業も含む
「2007年国内CIO調査:ITサービス利用実態」(2007年6月)
Source: IDC Japan, July 2007

システム開発におけるCOBOLの利用(1)

2005年の最大プロジェクトにおける開発言語

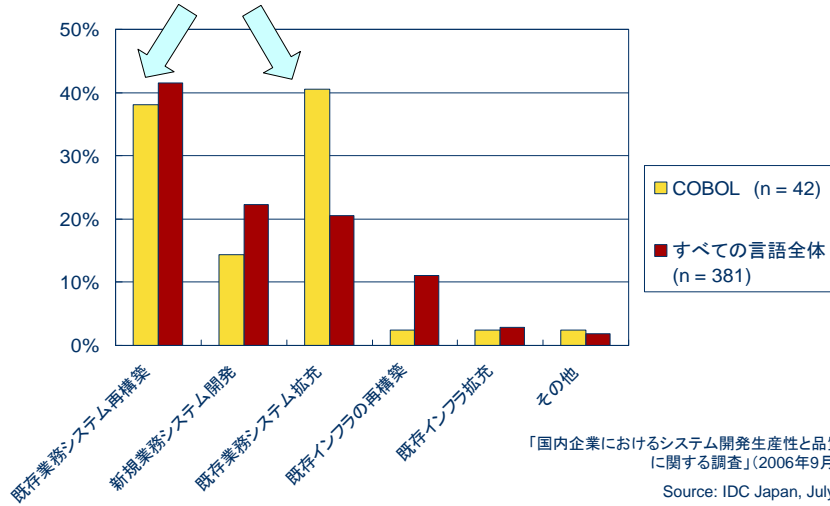


プロジェクト内で最も開発規模の大きかった言語
「国内企業におけるシステム開発生産性と品質向上に関する調査」(2006年9月実施)

Source: IDC Japan, July 2007

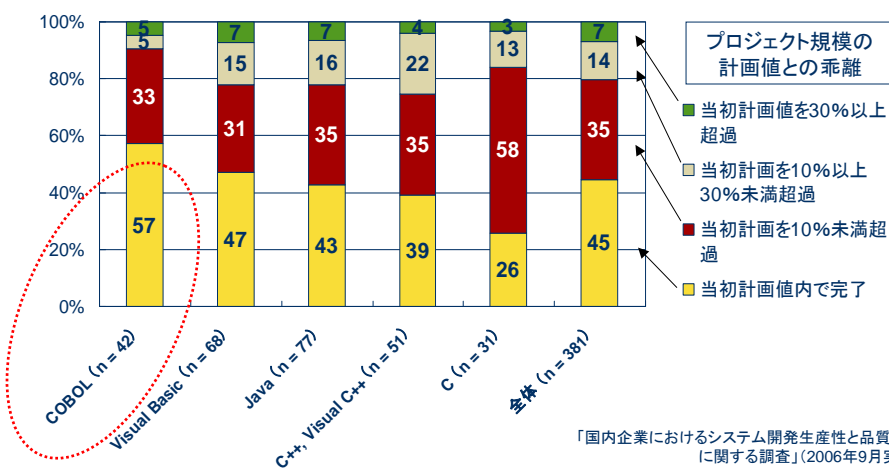
COBOLプロジェクトの目的

COBOLは既存業務システムの再構築や拡充に、多く利用されている。



COBOLプロジェクトの生産性・品質

多くのCOBOLプロジェクトは生産性・品質が比較的安定している。



COBOLの現状:まとめ

- 日本はメインフレームが多く利用されている。
 - システム開発の対象環境としても多く利用されている。
- COBOLを利用した開発プロジェクトはまだ多い。
 - 既存業務システムの再構築・拡充のために「現役の開発言語」として広く利用されている。
- COBOLプロジェクトは、(少なくとも現状では)生産性および品質の観点から比較的安定している。

Agenda

1. COBOLの現状
2. **基幹システムの課題:**
レガシー／オープン二元論を超えて

基幹システムはメインフレームなどのレガシーのまま残すべきか、それともオープン化してレガシー環境を一掃すべきか、という極論に陥ること。

- オープン推進派:「あらゆる基幹システムにおけるレガシー資産は一掃されるべき」
- レガシー維持派:「およそ基幹システムなるアプリケーションには、メインフレームが適している」

レガシーシステムの課題としてあげられること:

- ① 技術スキル、業務知識の継承が困難。
- ② ハードウェア費用が高い。
- ③ 大幅なシステム変更が困難。



上記の課題を、二元論によって語ることの不毛？

スキルの継承の問題

- 二元論 tends to say.....:
 - オープン派:「いわゆる“2007年問題”により、速やかにオープン化が必要。」
 - レガシー派:「基幹システム管理のためのスキルは必要な投資として実施するから心配ない。」
- 実際は.....:
 - 人材・スキルの育成は、オープン／レガシーの選択によってのみ決まるものではない。(例:企業合併によるシステム統合などでもスキルの育成が実施されることもある。)
- 二元論では、現実解が見えにくくなってしまう。

システム変更困難の問題

- 二元論 tends to say.....:
 - オープン派:「スパゲッティ状態の古い資産から脱却すべき。」
 - レガシー派:「大幅な変更よりも、日々の運用管理における信頼性・安全性のほうが重要。」
- 実際は...:
 - 大幅な変更にせよ、定常的な運用の安定性にせよ、問題はシステムデザイン最適化であって、レガシー／オープンの二者択一の問題ではない。

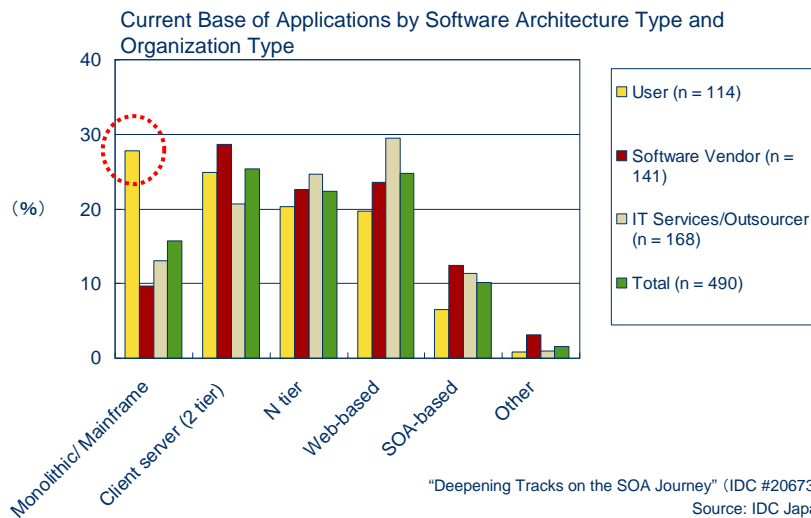
二元論につきまとう「神話」:

「米国企業はIT利用において、日本より先進的である」
(「ゆえにオープン化が進んでいる」)

- 実際は、先進的かどうかを判定するのは難しい。
- むしろ基幹システムの将来を描くためには、国内各企業が自社内の様々な要因を考慮して、各々最適な道を模索する必要がある。

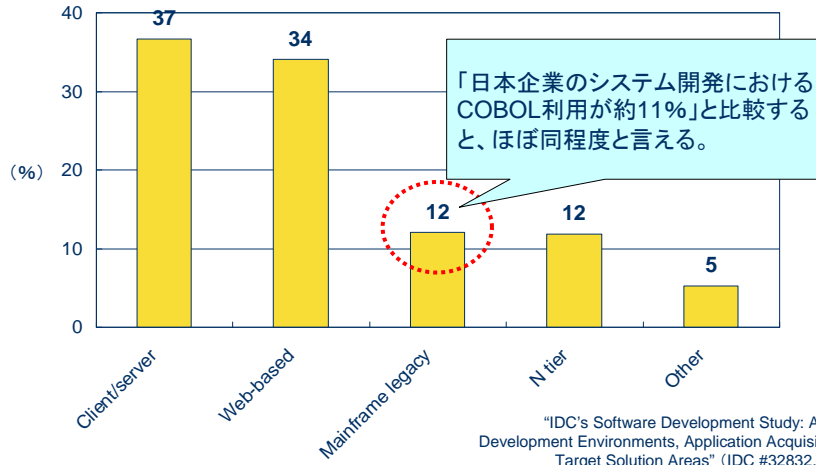
米国におけるメインフレームの利用(1) 既存業務システムの構成

米国のユーザー企業でも多くのアプリケーションにメインフレームが使われている。



米国におけるメインフレームの利用(2) 開発プロジェクトの対象環境

Application Architecture : Current Development Efforts

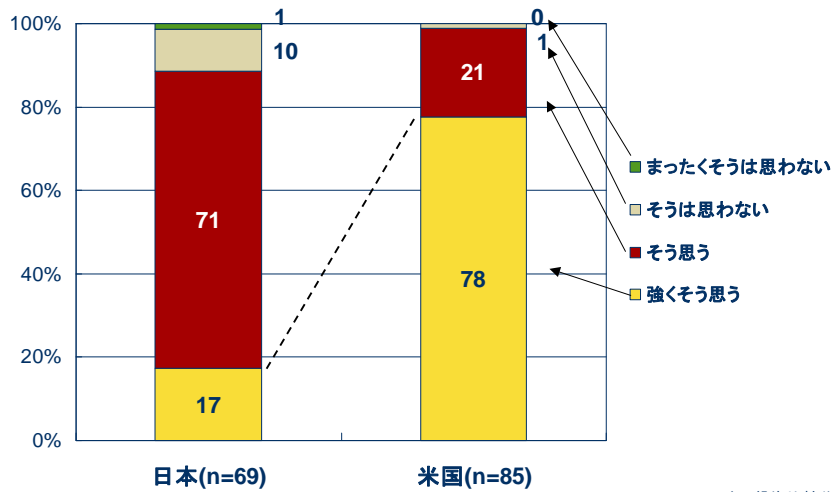


"IDC's Software Development Study: Architectures and Development Environments, Application Acquisition Trends, and Target Solution Areas" (IDC #32832, February 2005)

Source: IDC Japan, July 2007

米国企業におけるIT利用の先進性？(1)

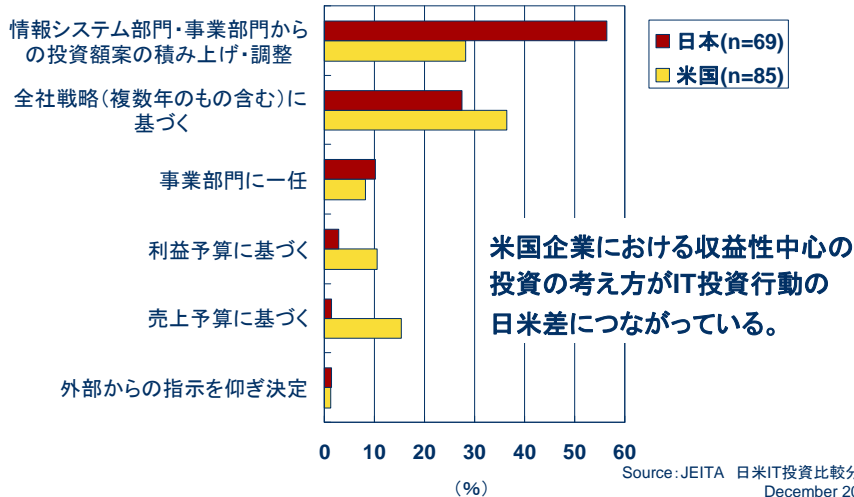
「ITは企業の競争力を強化すると思うか？」



Source: JEITA 日米IT投資比較分析
December 2006

米国企業におけるIT利用の先進性？(2)

IT予算決定方法



レガシー／オープン二元論の不毛

- 「絶対メインフレーム」または「絶対オープン」といった「絶対の解」はない。
- 「スキル」や「人材」を市場から調達することに腐心するあまり、それらを育成する取組みをおろそかにしてしまう。
 - 育成するための長期的な視点が欠如しがちになる。育成する方法は一つだけではない。
- レガシー＝スパゲッティ状態、と決め付けてしまう。
 - COBOLアプリケーションは、企業における永年のシステム化の歴史が育んできた「知恵」の結晶であることを認識すべきである。
- 技術的優位性の視点でのみ考えがちになる。
 - 米国との違いからわかるように、経営や投資に対する考え方の違いも、基幹システムの今後を決める要因である。

まとめ：
レガシー／オープン二元論を超えて

最適な基幹システムの将来を描くために：

- 「二元論」的な大雑把な議論では現実解は見えてこない。
- 人材育成、投資決定・評価プロセス、企業ガバナンスなど、個別の企業の事情によって、解は異なることを認識すべき。

ありがとうございました。

メールでのお問い合わせは：

itomimei@idcjapan.co.jp

伊藤 未明
IDC Japan
ITサービス リサーチマネージャー



本テキスト中のデータ数値は、四捨五入により合計が一致しない場合があります。

本テキストの著作権はすべてIDC Japan株式会社に帰属しています。本テキストの複製、または内容の流用、転載はIDC Japan株式会社の許可なしには出来ません。